2025年2月5日

舞台的空間に巻き起こる同調に関する研究
–舞台の情動圏から都市の共有感覚へ–

建築学専攻　　MJ23150　溝渕（みぞぶち）　喬一朗（きょういちろう）
プロジェクトデザイン研究　　指導教員　岡野　道子

序章　はじめに

0-1 研究背景

古来より舞台、劇場では演者、観客の同調が起こっていた。日本では自然が異界に通ずるもの、あるいは異界そのものとして崇敬の対象とされてきた。その異界、神に対しての奉納は舞台を通して行われ、演者が神に対して奉納、またはその神に成り変わり、舞い踊ることで神、演者、観客の一つの同調が起こっていた。舞台で行われる演劇的行為は様々な用途で使用され、前述した奉納のため、宗教の布教のため、ロンドンで行われた王朝劇を利用した政治のためなど、様々な人間の思考が交錯し、特別な空間が出来上がっていた。現代ではアーティストのライブ会場や歌舞伎の花道から応用されたアイドルのステージなど、大きな同調が形成されている。舞台上で形成される同調はその時間、空間でしか起こり得ない。そこで行われる同調は現代の場において有益な時間、空間を提供する可能性を秘めている。

0-2 研究目的

本研究では、舞台、劇場に焦点を当て、舞台、劇場が作り出す界隈を中心として形成される同調について着目し、分析考察し、明らかにする。そして明確化された同調を現代の場に転用する提案を行うことで、今後の場づくりに寄与することを目的としている。

0-3 研究方法

第1章では演劇の変遷をたどり、今までどのような演劇的行為が行われてきたのかを明らかにする。第2章では演劇的行為の定義を行い、各演劇的行為の中で演者と観覧者がどのような同調を起こしてきたのか分析を行う。第3章では各同調がどのような舞台、観客席の形式をしているのか、また、舞台、観客席の面積と舞台、観客席の距離から各同調を作るためにはどのような舞台形状が良いのかを明らかにする。第4章では1-3章を踏まえて設計提案を行う。

第1章　演劇的行為の歴史

1-1 古代

古代の演劇的行為は宗教的祭祀や遊戯を起源とし、西洋ではギリシア悲劇やローマ劇、日本では縄文祭祀や土製仮面が発展した。これらは神や自然への奉納や祈願と結びつき、特別な空間で感情や信仰を共有する役割を担った。

1-2 中世

中世の演劇的行為は、宗教的要素と大衆娯楽が融合し、独自の発展を遂げた。西洋ではキリスト教の布教を目的とした宗教劇が始まり、視覚的な説教として民衆に受け入れられたが、娯楽化が進むと再び教会から批判を受けた。一方、日本では散楽や猿楽が発展し、田楽や延年などと相互に影響を与えつつ、観阿弥・世阿弥によって能楽として完成された。これにより、宗教的儀式と芸術性を併せ持つ形式が確立した。

1-3 近世

近世の演劇的行為は、社会的変革の中で大衆文化や政治的メッセージの発信手段として発展した。西洋では、新古典主義演劇やオペラが貴族文化を反映しつつ、市民階級にも広まり、政治的内容を含む劇も登場した。一方、日本では歌舞伎や人形浄瑠璃が庶民文化として栄え、社会的背景を反映した作品が多く生まれた。これらの演劇は、芸術性と娯楽性を融合しながら、人々の感情や思想に影響を与える役割を果たした。

1-4 近代

近代の演劇は、西洋文化の影響を受け、芸術性と娯楽性が融合した形式へと変化した。日本では歌舞伎の改良運動や新派、新劇が誕生し、観客層が多様化。西洋では中産階級向けの日常的娯楽として進化し、演劇が広く支持された。

1-5 現代

現代の演劇的行為は多様化し、伝統芸能と新しい舞台形式が共存している。日本では小劇場運動やアングラ演劇が台頭し、個々の思想や創造性が重視されるようになった。また、スポーツイベントやライブコンサート、アイドルのステージなど、非日常性を強調した大規模な演劇的行為が観客の熱狂を引き出している。これらの形態は、演者と観客、観客同士の関係性を再定義し、感情的な一体感を生む新たな文化的現象を形成している。

1-6 考察

本章では、演劇的行為の歴史を古代から現代まで概観し、宗教的奉納や娯楽として始まった演劇が、時代や文化の影響を受けて多様な形式や目的へと進化し、「同調」の形も多様化したことを明らかにした。

第2章　演劇的行為と同調

2-1 演劇的行為の定義

大辞泉によると演劇とは「観客を前に俳優が舞台で身ぶりやせりふで物語や人物などを形象化し、演じて見せる芸術。舞台装置・照明・音楽など視覚・聴覚上の効果を伴う総合芸術。芝居。劇。」*1と記載されている。このことから演劇的行為の定義を「観客を前に行為者が意識的に身体、声、空間を操作し、現実とは異なる虚構や象徴的な現実を表現する行動」とする。

以上の定義を踏まえて演劇的行為に関わる25の事例について文献調査を行う。

2-2 演劇的行為に関わる行為について

本節では、演劇的行為に関わる多様な事例を分析した。日本の能楽は仮面と簡素な動きを通じて彼岸と此岸を体感させ、歌舞伎は大胆な演出で観客の熱狂を生み、文楽は人形を用いて人間以上の感情表現を実現した。西洋では、オペラが音楽とドラマを融合し広く支

持を得た一方、イギリス演劇は公共劇場で社会的メッセージを発信する場となった。また、宗教劇やアングラ演劇、スポーツ、ライブコンサートなどの現代の事例も、舞台形式や観客との関係性を通じて独自の同調を生み出している。これらの分析を通じ、演劇的行為が社会・文化と相互作用し、観客の感情や行動に多様な影響を与えてきたことが明らかになった。

2-3 演劇的行為の同調

同調は、演者と観客、あるいは観客同士の感情的・身体的・精神的な同期現象と定義される。分析の結果、演劇的行為を目的とするか、手段とするかという縦軸と、観客の関与度を示す動的・静的という横軸を設定し、25 の演劇的行為をマトリクス上に分類。それぞれが「熱狂」「芸術」「宗教」「政治」「教育」の 5 つの同調に整理された。「熱狂」では観客の動的反応が重視され、「宗教」では静寂や神聖な空間が重要視されるなど、同調の特性は舞台の形式や目的に大きく依存する。本節は、同調が演劇的行為の成立において不可欠であることを示し、同調の特性を空間設計に活用する可能性を示唆している。

第 3 章　同調と舞台形式

3-1 分析と方法

第 2 章で確立した各同調がどのような舞台形式だとその同調を起こしやすいのか、分析を行う。分析方法は[舞台と観客席の最前列距離、最後列距離]と[本舞台面積]の数値指標を使用し、定量マトリクス分析を行い、相関関係を調査する。また、舞台の平面図、断面図、立面図を使用し、舞台形式と観客席形式を表にまとめ、同調と舞台形式、観客席形式の関係を調査する。そして第 2 章で選出した演劇的行為のうち舞台的空間を伴うものをデータシートにまとめる。

3-2 分析結果

同調と舞台形式に関する分析結果を示し、各同調がどのような舞台空間および観客席形式と結びつくかを具体的に考察した。「熱狂」は、アリーナステージ形式と立ち見席や傾斜席の組み合わせが典型的であり、観客同士の顔が見える配置が観客の動的な反応を促進することがわかった。「芸術」はエンドステージ形式が中心であり、傾斜席や複数階席が多く見られる一方で、平土間椅子座や床座などの多様性も観察された。これにより、「芸術」では観客が静的であることが求められるが、観客席形式の統一性は限定的であることが示された。

「宗教」においては、サイドステージ形式が主流で、舞台が断面的に高く設計されることが特徴である。これは宗教的行為が信仰対象に向けられる性質を反映している。「政治」では、スリーサイドステージや立ち見席が顕著で、演者のメッセージを広く伝達することを目的としている。一方、「教育」はエンドステージ形式と平土間椅子座や床座が主流で、観客が静的であることを前提とした設計が求められる。

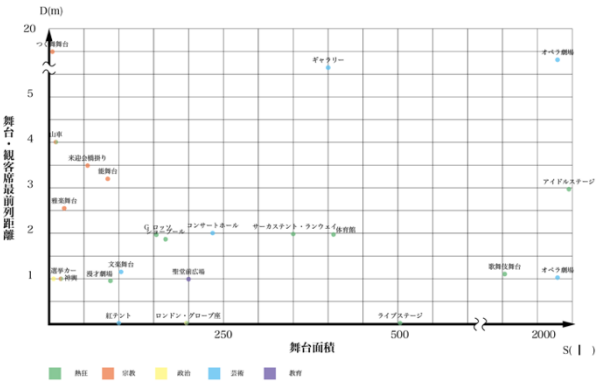

図 3.1 舞台・観客席最前列距離定量マトリクス分析

3-3 小結

第 3 章では、同調を形成する舞台形式や観客席形式について分析を行い、各同調の特徴に応じた空間設計の条件を明らかにした。「熱狂」はアリーナステージと動的な観客配置、「宗教」はサイドステージと神聖さを強調する構造、「芸術」はエンドステージと多様な座席形式が適していることが示された。また、「政治」は広範なメッセージ伝達を可能にする形式、「教育」は静的な観客を前提とした設計が重要である。本章の知見は同調を促進する舞台空間の設計指針を提供する。

第 4 章　設計提案

舞台空間内で生じる同調現象を都市空間に拡張する設計提案を行う。対象は、さいたまスーパーアリーナとさいたま新都心駅を結ぶ広場で、通行者が多い一方で滞留が少ない現状を改善する。ライブ会場に向かう際には高揚感を高め、終了後には余韻を持続させる仕掛けを広場内に設け、混雑の緩和を図るとともに、非来場者も楽しめる空間を目指す。これにより、広場を多様な利用者に開かれた交流の場とし、都市とライブ文化の新たな関係性を提案する。

第 5 章　終わりに

演劇や音楽が人々の感情や精神に影響を与える力は古くから認識されてきた。それらの演劇的行為は、観客や演者の間で「同調」を生み出し、一体感や精神の安定を促し、心理療法としても利用されてきた。その舞台空間内に内包される「同調」を外部へと拡張することで、都市空間の混雑回避やライブ会場に向かう人同士のコミュニティの形成を目指した。今後本研究が都市空間の形成の仕方の一つのモデルとなり、その他建築物の設計提案の一助となることに期待する。

参考文献

(1) 世阿彌著：申楽談義：岩波書店：1928 年 5 月
(2) 須田敦夫著：「日本劇場史の研究」：相模書房：1957 年 7 月
(3) The 能.com ：2023 年 7 月 20 日
(4) 西和夫著：祝祭の仮設舞台-神楽と能の組み立て劇場-：彰国社：1997 年
(5) 磯崎新：見立ての手法：鹿島出版社：1990 年 8 月
https://www.the-noh.com/jp/sekai/stage.html